座談会

ー板東久美子消費者庁長官を囲んでー

「女性技術士の活躍に向けた期待」

Expectation for the Activity of Women Professional Engineers

板東久美子，石田佳子，廣瀬由紀，中田よしみ，相良純子，佐野愛美

月刊『技術士』7月号は特別企画として，本会の男女共同参画推進委員会の全面的協力を得て，『女性技術士の活躍』をメインテーマとしました。その冒頭を飾る企画として，内閣府の男女共同参画局長も務められました，板東久美子消費者庁長官をお訪ねし，石田佳子男女共同参画推進委員会委員長はじめ各年代の女性会員で囲み，これからの女性技術士の活躍について多いに語って戴きました。（広報委員会）

板東（ばんどう） 久美子（くみこ）

消費者庁長官

略歴

1977年4月　文部省入省
1995年4月　同　　生涯学習局婦人教育課長
1998年4月　秋田県副知事
2006年7月　内閣府男女共同参画局長
2009年7月　文部科学省生涯学習政策局長
2012年1月　同　　高等教育局長
2013年7月　文部科学審議官
2014年8月　現職

石田　佳子（いしだ　よしこ）
男女共同参画推進委員長　技術士（衛生工学／建設／総合技術監理部門）
（株）環境技研コンサルタント勤務。専攻は高分子工学。当時の日本は公害問題が深刻であったことより，環境アセスメントに興味を持ち現在の会社に就職。入社後は，一貫して廃棄物処理に関する業務に携わる。建設コンサルタントでは技術士は必須であり，自身のキャリアの幅を広げるため複数部門の取得にチャレンジ。

廣瀬　由紀（ひろせ　ゆき）　技術士（情報工学部門）
（株）山下設計勤務。高校生のころに一生続けられる専門的な仕事に就きたいという考えから工学部に進む。ゼネコン勤務後，現在の設計事務所に転職。この業界では，一級建築士の資格は持っていて当たり前。新しい環境で自分の実力を認めてもらうには，ということで技術士を取得。

中田　よしみ（なかた　よしみ）　技術士（原子力・放射線部門）
（株）日立プラントコンストラクション勤務。高校生のときにオープンスクールで，実物の原子炉を見て「やりたい」と思い，進路を変え原子力の道に入る。平成16年に原子力・放射線部門ができたときは，子どもも手間の掛かる時期であったのと，転職などもあって技術士の取得は全く考えていなかったが，その後転職先の上司から勧められ挑戦。

相良　純子（さがら　じゅんこ）　技術士（建設／総合技術監理部門）
（株）建設技術研究所勤務。高校時代にカナダに留学，約70カ国からの生徒が在学するインターナショナルスクールで世界の問題に触れた。中立的な立場から世界の社会的課題の解決に貢献できる職業をめざし，土木工学を専攻。国際的に活躍することをめざし，キャリアアップのため転職も経験。現在は建設コンサルタントで，河川計画や防災分野の業務に従事。建設部門では河川と建設環境の技術士。

佐野　愛美（さの　まなみ）　技術士補（応用理学部門）
公益財団法人廃棄物・3R研究財団勤務。家族がみな理工系である。女性が自分で稼いで食べていくには技術の道が一番確実と思い，機械系の学科へ。自動車の部品会社に就職，生産技術を担当。現在2才児の母。育休中に会社が移転し，復帰が難しく転職。専門も変わり，現在は，廃棄物に関する調査研究，教育活動に携わる。勉強して新しい技術を身に付けたい。

1．女性技術士との出会い

【石田】　本日は，皆さんお忙しい中，お時間をいただきありがとうございます。
板東さんは政府機関で要職を務めていらっしゃいますが，これまで女性の技術者や技術士に対しどのような印象をお持ちでしょうか。
【板東】　日本の社会や企業においては技術分野にいる女性がまだ圧倒的に少ないと思います。特に女性技術士は圧倒的に少なく，今日お集まりの皆さんもまだまだフロンティアでいらっしゃると思います。
女性技術士の方々には，それぞれの仕事を地道かつ着実に積み重ねている人たちが多いのではないでしょうか。そういう人たちをもう少し前面に押し出して，こういう人たちが活躍しているというのを見せていくことが必要だと思います。
特に，安全・安心に関わるような分野とか，消費者側に立って技術を考える場面での女性の活躍を大いに期待したいと思います。
【石田】　女性技術士やリーダーとして活躍できる人を多くするためには，ベースとなる女性技術者を多くしないといけない，そのための活動が求められていると思っています。
【板東】　技術士のように技術者の中でも指導的な役割を期待されている人たちは，日本の社会や組織においては，こつこつ業務を積み上げながら力を付けてその役割を担っていくケースが多いと思います。特に女性の場合には，子育てとか家庭生活との関係を両立させながら，とにかく長く役割を果たしていくことが最低限必要になってきます。
【石田】　板東さんは，女性が少ない世界の中でキャリアを積んで来られていますが，そこで考えられてきた

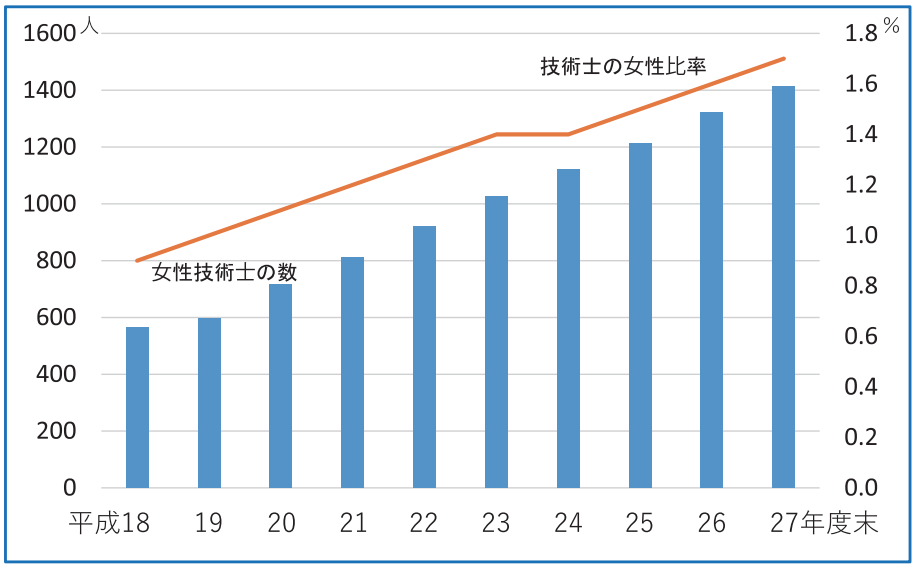


図１　女性技術士はどのくらい！

平成27年度末（平成28年3月末）の登録者は１415人。男女合わせた登録者の1.65％。平成19年度からは毎年100人を超える合格者があり，数は少ないものの，女性技術士は確実に増加している。
一方，工学系に学ぶ女子学生は平成25年度12.3％（農学は43.6％，理学は26.2%）*である。理工系進学者が減る中で，女子学生は増加傾向にあり，将来技術士に挑戦することが期待される。　（＊文部科学省学校基本調査）

ことをお聞かせ頂けますか。

【板東】　子育てしている人は同じだと思いますが，急に子どもが熱を出しお迎えに行く必要がでた時など，瞬時にいろいろ考えるわけです。仕事ではいつもそういうことを考えざるを得ないところがあり，日常的にそういう判断を求められるような訓練もしてきたと思います。それらを通して，私も仕事上のいろいろな苦労とかリスクに直面するということを恐れないようにたくましくなったという感じがします。

【石田】　確かにいろいろなことを瞬時に考えなくてはいけない場面は良くあります。

【板東】　いろいろな思いや事情を抱えながら働いて苦労した分，いろいろな人たちの立場や苦労に配慮しなければ，チームの力をアップできないことが良く分かります。そういう視点を知らず知らずに身に付けてきたので，ちょっとやそっとのことではあまり動揺しないのが女性技術者ではないでしょうか。

【廣瀬】　私も時間管理をはじめとするマネジメント手法のようなものを日常生活の上で知らず知らずの内に体得することができたと感じています。周りの女性を見ていても，しなやかさというか，非常に適応力が高いと思います。長く仕事を続けていく上で，一つの仕事にしがみ付くだけではない柔軟性も感じます。人間関係の上では，女性ならではの心遣いや細かい気配りなどを発揮しコミュニケーションをスムーズにすることができます。

2．社会を変える必要がある

【石田】　板東さんは，内閣府では男女共同参画推進の最前線にいらっしゃってご苦労されたのでは。

【板東】　内閣府のときは，割合女性が多い職場だったのでそんなに苦労はありませんでしたが，若干逆風的なものもあって，女性の活躍が重要だと言われてはいるけれども，今までの働き方に合わさないといけないようでは，明るい希望や将来を描きにくいと感じました。
そこでワークライフバランスとか，働き方とか，社会の考え方とかのいろいろな仕組みを，女性だけではなくて男性も一緒になって変えていかないといけないと考えました。そういう意味で『女性の活躍にはワークライフバランスを！』と言いました。安倍内閣では女性の活躍は政権としても最優先事項になっていますし，経済にとっても非常に重要な位

置付けになっています。
若い人たちが夢を持って，積極的に前に出ていこうという気持ちになれるような状況を作って行かないと，また社会の大きな枠組みが変わって行かないと，本当の意味での男女共同参画や女性の活躍は進まない，と実感しています。

【石田】　男女共同参画と言うとどうしても女性がクローズアップされますが，男性も働き方や意識を変えてもらう必要がありますね。そのような中，板東さんはどのように取り組んで来られたのでしょうか。

【板東】　自分一人ではなくて，いろいろな人たちと一緒に挑戦していくというのは非常に楽しいことだと思っています。前向きに考えれば考えるほど道は開けると，今までの経験でそう思います。いろいろな人と一緒に仕事をすることで，自分一人ではできないことが実現できたという手応えを積み重ねてきたなという思いがします。

【石田】　現在，女性技術士は約1 400人で，技術士全体の1.7 %です。10年前は0.8 %でしたので，比率は2倍にはなっていますが，数はまだまだ少ない状況にあります（図1）。女性が技術分野で活躍するため，男性管理職の方に何かアドバイスをいただけますか。

【板東】　アドバイスとまではいかないかもしれませんが，今，企業活動や経済の発展を考えるときに，新しい価値を生み出していくことは他との差別化も含めて非常に重要です。同じような価値観で，今までの延長線上で動いていてはなかなか競争力が持てない。このためには，女性に限らずですが，多様な人たちのダイバーシティーということが，いろいろな組織の中で欠かせないことになっていると思います。
私も消費者庁にいますと，その強みとともに難しさも感じています。消費者庁はいろいろな省庁の連合体です。また企業の技術系の人もいるし，管理栄養士，薬剤師，弁護士など専門的な資格を持っている人もいて非常に多様です。ただその強みを生かしていくのは結構難しい。共通の意識もうまくつくりながら，一人一人のいろいろな事情や希望も把握し，そこにできる限り柔軟に対応していけるような組織の在り方が必要です。そうしていかないと日本の企業とか技術の分野は成り立っていかないと思うのです。これは女性を生かすというだけの問題ではなくて，この先本当に必要になってくることです。
男性の場合も，内面ではみんないろいろな事情や希望を持っていて，そういう人たちを生かせているのか，が今大きな変化の中で問われているのではないかと思っています。「ダイバーシティーを生かすマネジメント」を真剣に考えないと組織の発展や競争力の面で後れを取ることになりかねないと思います。

【石田】　相良さんは，海外で学ばれましたが，会社はその経験を高く評価していますか。

【相良】　今の職場では，最近は女性社員も増え，出産で一時休んでも復帰する人も多くなっています。外国人社員も増えてきており，私の下にもいます。会社も多様性を重視し，いろいろな働き方が可能な職場づくりを今進めているところだと思います。私の海外経験が評価されているかはわかりませんが，これまでの経験や視点などが，業務や会社の中で，何かしらの形で役に立っていればいいなと思います。

【石田】　海外で女性の働き方の違いは感じましたか。

【相良】　私はカナダの大学，アメリカの大学院で土木工学を勉強しまし

たが，学生の３割から４割は女性で日本より多いと思います。また，海外で出会った女性技術者たちは，自分は社会や会社にこんな貢献ができる，自分にはこんな価値があるということを，積極的にアピールする人が多いように思います。

板東さんの「これまでの働き方に女性が合わせないといけないというのでは，女性のさらなる活躍をといっても難しい」というお話は，そのとおりだと思います。私は，独身なので，子育て等の壁にまだ直面していませんが，いろいろな経験を積んだ女性には，それだからこその強みがあると思います。ダイバーシティーが進むことで，個々人の強みを会社や社会が，積極的に生かせる形になっていけばいいと思います。

3．子育てや介護との両立

【石田】　中田さんは二人の子どもさんをたくましく育てながら長く仕事を続けられています。

【中田】　私の場合，共働きをよい事と考え心の中で「もしこの仕事が嫌だと感じたら辞めてもいい」と思っていました。仕事に対する意見を遠慮しないで言えていました。自分が何とかしなきゃと思う心もあるのですが，楽しんで働こうと思っていたので多分今まで続けられたのかな。保育園から電話が掛かってきたらどうしようとか，「休み過ぎじゃないの？」と言われたらどうしようとか，と思ったこともありますが，どう思われてもいいと腹を据えたことが功を奏したと思います。

【石田】　それは，技術士になっている強みがあったからですか。

【中田】　いえ，技術士になって私の周りで「よく頑張ったね」と言ってくれたのは夫だけでした。仕事でも技術士が必ずしも必要ではありません。しかし職場以外では技術士だからこそいろいろな人と関わることができました。例えば，一般の人に放射線と放射能の違いについて話ができる機会を得られたことなどは技術士になってすごく良かったと感じたことのひとつです。

【廣瀬】　私の職場では女性の管理職は管理職の１％しかいません。しかし，20代，30代は３割近く女性がいて，最近は出産後仕事に復帰する人が非常に増えています。会社も，女性が活躍できる企業は男性も活躍できる企業なのだという見方にやっと気が付いてきています。この点に力を入れていかないと優秀な学生が入ってくれませんし，女性も男性も同じように活躍できる組織づくりが重要だという雰囲気にようやくなってきたところです。

【板東】　これから５年，10年たつと団塊の世代が75歳以上になり，ある意味で要介護世代になってきます。そうすると，介護のために会社を休まざるを得ないとか，そんなに長時間働けません，転勤できませんという人が突然増えてくることが考えられます。出産・育児は推測がつきますが，介護はいきなり来て，それも管理職とか中堅になる人が関係する可能性が大きくあります。誰か

がちょっといなくなったら動かなくなる組織であってはいけない。そういうリスク対応も含めて車のハンドルで言えば遊びの部分がないと組織が回らないのではないでしょうか。何かあったときに，組織全体でカバーできる体制がやはり重要になってくるのだと思います。

【石田】　介護，子育ても含めて組織全体をどうマネジメントしていけば良いかが大切になってきますね。

【中田】　私の場合も，介護をしなきゃいけないけど，実家と自宅が離れているので，結局誰かに頼らざるを得ない，という問題があります。介護の場合はなかなか自分から言えない人が多いように思います。会社とかチーム内で苦しいと言ってくれたら協力できることがいろいろとあると思うのですが。

【板東】　打ち合わせや会議の持ち方もちょっとこういうふうにしようかとか，カミングアウトしてくれれば組織の中で考えられることがあります。本当にいろいろな人たちが様々な事情を抱えており，女性の問題だけではない。特に技術者の場合辞められたら企業にとって大きな損失になると思います。代わりが利かない貴重な人たちが生きがいを持って働けて，組織としてもうまく機能していくやり方が重要ですね。

4．女性ならではのリスクマネジメントを

【石田】　ここで，改めて現職の消費者庁長官として，技術士に対しての思いを語っていただけますか。

【板東】　消費者庁に来て改めて安全・安心に対する信頼の確保はすごく重要だなと思いました（図2）。安全・安心というのは，何もその製品が本来持っているものだけではなくて，それに人間が関わってきます。人間の行動がどういうふうに関わるのかという想定はかなり幅広くしないといけないし，どれくらい想像力を働かせていくかということがすごく重要だと考えています。消費者版事故調と言われている消費者安全調査委員会はまさにそういうことをいろいろ検討しています。技術者としてもヒューマンファクターに関する感性，想像力をより強く持ってもらうことは重要です。特に指導的な役割を果たす人たちには，いかにしてそういう人材を育成していくか，ということがとても重要だと思います。

また，女性の活躍によって新しい技術の在り方やアプローチがより広がってくればいいなと思います。

【石田】　私たちは女性として，生活者，消費者，そして技術者の目を持っています。女性らしい視点が生かされるところは多いでしょう。

図2　消費者庁の役割と使命に関するパンフレット（表紙・目次）

【相良】　私は治水や防災などの分野で社会インフラをつくる仕事をしていますが，消費者にとってはメリットがなかなか分かりにくいものだと思います。ただインフラなしには，安全・安心な暮らしも持続可能な社会も築けません。私自身はそういう仕事に関われることにやりがいを感じています。

【板東】　治水・防災というのは災害時の個人がどのような行動をとるかにもすごく関わってきます。防潮堤を高くするか，それとも行動を予測し，何がポイントになるのか。

【相良】　そうですね。技術はハードだけではない，というのはまさにそのとおりだと思います。どのように情報を伝えるかなどソフト面も重要です。

【廣瀬】　今までは技術者は比較的寡黙で，正しい結果だけ出せばいいというふうに考えがちだったと思います。震災を契機に一般の人たちが正しく判断できるための情報を技術者が説明する責任があるのではないかと強く感じています。

また津波というのは建築学と非常に関係が深いのですが，直接の専門ではないのでこれまで口を出さなかったのです。しかし，建築家の目から見れば津波にはどういう建物が強いかということはわかるので，専門の周囲にももう少し目を向けて意見を出していかなければと思っていま

す。特に技術士になる前は考えたことがなかったのですが，技術者としての社会的責任や技術者倫理を技術士の役目としていかなければいけないと思っています。

【板東】　倫理とかコンプライアンス面で，ここ最近問題になっていることはBtoBの話が多いのですが，最終的にいろいろな不利益を受けたり，不安を感じているのは消費者です。くい打ちデータ改ざん問題は，企業間の関係で生じている話かもしれませんが，最終的に安全を脅かされるのは消費者なのです。

また，バス事故もそうですが，価格が安ければいいという話ではない。しかし，情報が提供されないと合理的な選択がどこまで確保されるか問題です。

消費者である国民に対して必要な情報が提供されることは当然ですが，それに対して専門技術的な面からもサポートもあるということが必要になってくると思います。

【石田】　消費者庁は消費者教育にもとても力を入れておられ，それをWEBサイトで公開されています。

5. リスクコミュニケーションと女性

【佐野】　育児をしていて情報リテラシーに関して気になる事があります。最近はネット上での自分に都合のいい書き込みや人の意見を鵜呑みにしてしまう親がいると感じます。SNSや質問サイトで，素人があたかも専門家のように病気や発達のことを発言しているのをよく目にします。かかりつけの小児科の先生から聞いた話では，ネットの情報を根拠にして，医者に「こういう病気みたいだからこういう薬を出して下さい」と言ってくる親がいるそうです。どんなに衣食住に安全対策をしても情報を適切に扱えないと，子どもを危険にさらしてしまいます。物理的な安全だけでは子どもを守れないので，私たち消費者も力を付けていくことが必要だと思います。

【石田】　賢い消費者というのでしょうか，子どもたちもそういう中で育ってくると，科学的な知識がもっと身につきますよね。

【中田】　東日本大震災の後，社内・外で何に気をつけて，どのように行動すればよいかたずねられました。例えば，野菜はどのくらい洗えば大丈夫なのかとか。放射能を測定して基準値以下のものが市場に出回っているので，私は土さえ落としていれば大丈夫と思うのですが，もっと丁寧に洗ったほうが安心できる人がいます。その人が安全・安心と感じる基準と，放射線の基準との間で，今も悩んでいます。技術者として「疫学的な調査もあって，問題ないです」と言っても，すぐには納得してもらえません。ネットの情報に踊らされない，自分で判断できる消費者や母親，父親になってほしい。安心して暮らすために，どうしたら良いのか一緒に考えられるような関係作りをしたいと思っています。

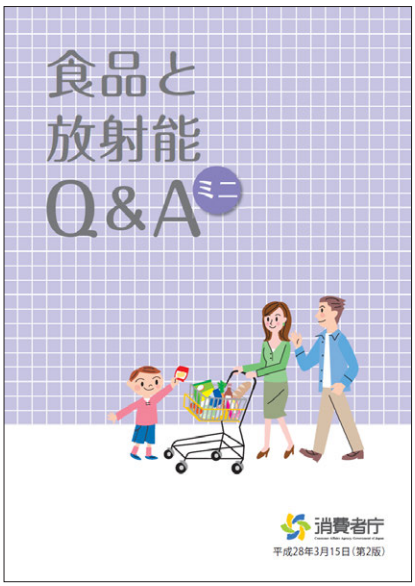


図3　リスクコミュニケーションのための
ミニパンフレット（表紙）

【板東】　消費者庁もその点には頭を悩ませています（図3）。リスクコミュニケーションはいろいろな分野で重要です。特に放射能と食品の関係とか，食品添加物とか農薬とかに関わるリスクにも，全くのゼロリスクはありません。あるリスクをゼロにしようとすると別のリスクが増します（例えば添加物による保存期間など）。それをバランスよく，いろいろなリスクについて知りつつどう判断していくのかという全体的な力が求められます。

【中田】　月刊『技術士』の2月号に，書かれていた「親子サイエンスサロン」というファミリーで学べるやり方もすてきだなと思いました。

【廣瀬】　情報リテラシーの重要性をどうやってみんなに伝えていくかが難しくて悩んでいます。身近な人に聞かれれば答えることはできますが，もっと広い範囲に効果的に伝える方法については，これから探っていきたいと思っています。

【相良】　今自分がやっている仕事のことでも，多くの対象にきちんと伝えていくためには，さらに幅広い知識をもっていないといけない。適切な情報を伝えるためには，勉強が必要だと強く感じています。

【板東】　女性技術者は相対的に見て，男性の技術者に比べてコミュニケーション力が豊かな人が多いので

はないかと思います。今日もお話を聞いてますますそう感じました。コミュニケーションというのは，技術を安全に使い利用していくのにも必要です。ぜひ女性としての特質を生かしてもらいたいと思います。

6．女性技術士への期待

【石田】　最後に改めて技術士や日本技術士会，また男女共同参画推進委員会に向けたメッセージをいただければと思います。

【板東】　私自身技術士の仕事を十分には理解できていないかもしれませんが，技術士は，倫理面も含めて，技術者として指導的な役割を果たしていくことができる力を持った人ですから，日本技術士会にはその技術士が活躍できる分野をもっと広げていくような活動を期待したいと思います。技術士という資格は，技術に対する信頼性や広がりを支えていく非常に重要な資格です。日本技術士会はそういう人たちによって構成されているだけではなく，レベルアップも制度の普及も図っている。技術士に活躍をしてもらうことのプラスの面はすごく多いと思いますので，大いに期待したい。

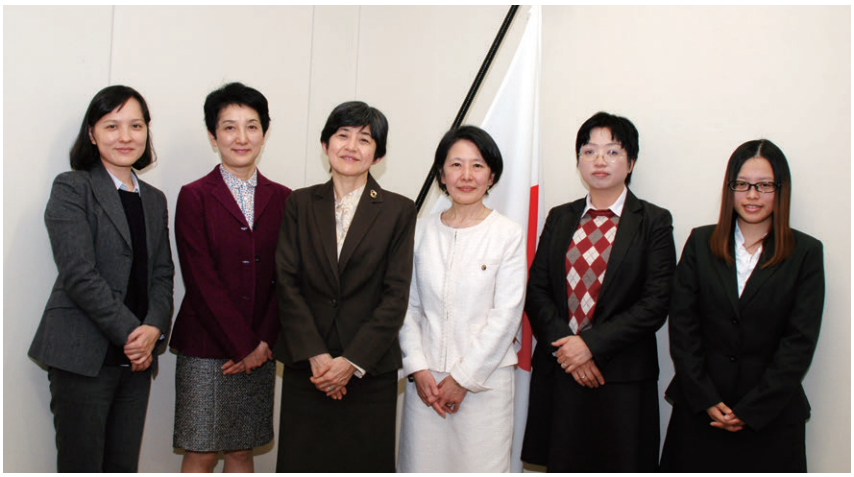
しかも，女性の活躍はまだまだこれからですし，女性を含め多様な人たちの技術分野のダイバーシティーを切り開く先頭として男女共同参画推進委員会が活動されることはとても心強く思います。ぜひ，技術が変わると世の中が変わる，社会が変わる。その大きな起爆剤となられることを期待したいと思います。

【石田】　板東さんの期待を受け皆さん方からも抱負を一言ずつお願いします。

【佐野】　これから技術の世界で生きていこうという若い女性に，家庭も自分も犠牲にしないで仕事を続けていく生き方でいいんだよということを言えるようになりたいと思います。そのために早く技術士になって長く仕事を続けて，それを証明できるようになりたいと思います。

【相良】　これまで目の前の仕事を一つ一つこなし，やり遂げたときの達成感を原動力として，今ここにいます。今後もこれまでの技術士としての経験や実績をコアにしていきたいと思っています。また若い世代に，楽しくやりがいのある仕事があるということを知らせる役割も担っていかなければいけないと思います。

【中田】　放射線ってこうだよという基礎的知識を教えるというのが私の今の社内の仕事です。それを社内だけではなくて，一般の社会に向けて発信したい。女の人もいろいろな分野で活躍できることを少しでも体現できたら嬉しいと思っています。

【廣瀬】　先ほど女性技術士は少ないという話がありましたが，実際日本技術士会で活動していると，女性の存在感は大きいと思います。これからも女性が発言しないと男性が気付かないことも多いと思いますので，頑張っていきたいと思います。

【石田】　板東さんからいろいろお話を伺い，技術士は男女を問わず社会のオピニオンリーダーにならなくてはいけない，社会に正しい情報を正しく伝えていく責任があることを一層強く感じています。日本が科学技術創造立国として持続的成長をしていくためには女性技術士が最前線で活躍できるようにならなければと思っています。板東さんのエールに応え，男女共同参画推進委員会でも女性の技術者教育や育成に力を入れて行きたいと思います。今日は，長時間ありがとうございました。（了）